第３６回
高知県国保地域医療学会

これからの地域包括医療・ケア
―フレイル予防を目指して―

プ　ロ　グ　ラ　ム

会　期　　令和６年２月２４日(土)　午後１時～午後５時 10 分

会　場　　Web 開催（配信拠点：高知城ホール４階 多目的ホール）

主　　催
高知県国保地域医療推進協議会
高知県国民健康保険団体連合会

第３６回高知県国保地域医療学会

目　的

　この地域医療学会は、地域保険としての国民健康保険の理念に則り、国民健康保険関係者が一堂に参集して、地域医療実践の方途を探求し、相互に研鑽を図ることを目的とする。

メインテーマ

これからの地域包括医療・ケア　－ フレイル予防を目指して －

会　期

令和６年２月24日（土）午後１時～午後５時10分

会　場

オンラインシステム「Zoomミーティング」によるWeb開催
（配信拠点：高知城ホール多目的ホール）

主　催

高知県国保地域医療推進協議会
高知県国民健康保険団体連合会

後　援

高知県
全国国民健康保険診療施設協議会

日　程　表

12:30	Web 開局
13:00	**開会式** **主催者あいさつ** 　高知県国保地域医療推進協議会　会長　　中尾　博憲 　高知県国民健康保険団体連合会　理事長　楠瀬　耕作 **来賓祝辞** 　全国国民健康保険診療施設協議会　会長　小野　剛　氏 **第 35 回優秀研究表彰式** 　四万十町国民健康保険大正診療所　事務長補佐兼診療放射線技師　大川　剛史　氏 「四万十町発!!『大規模災害時（DVI：Disaster Victim Identification 災害被害者身元確認作業）のオートプシーイメージング Ai 技術の活用』」
13:20	**研究発表** ・医 師 部 門　１題 　　座　長　　高知県国保地域医療推進協議会　医師部会長　　佐野　正幸 ・看 護 部 門　３題 　　座　長　　高知県国保地域医療推進協議会　看護部会長　　前田　順子 ・技術者部門　２題 　　座　長　　高知県国保地域医療推進協議会　技術者副部会長　篠田　知佐
14:30	休憩
14:35	**特別講演**（60 分） 　演題：「フレイル・ロコモ克服に向けて　ー経験と想いー」 　講師：本山町立国民健康保険嶺北中央病院　　副院長　石田　健司　氏
15:35	休憩
15:40	**パネルディスカッション**（90 分） 　テーマ　「これからの地域包括医療・ケア　ーフレイル予防を目指してー」 パネリスト【（20 分×3 人）（60 分））・ディスカッション（30 分）】 ・本 山 町：健康福祉課　主　幹　　大利　優　氏 ・仁淀川町：健康福祉課　課長補佐　　石本　まき　氏 ・大 月 町：長寿政策課（地域包括支援センター）　作業療法士　市吉　紗也　氏 助言者 　本山町立国民健康保険嶺北中央病院　副院長　石田　健司　氏 　全国国民健康保険診療施設協議会　　会　長　小野　剛　氏 座　長 　高知県国保地域医療推進協議会　医師部会長　佐野　正幸
17:10	**閉会式** **閉会あいさつ** 　高知県国保地域医療推進協議会　副会長　佐野　正幸

（注）状況により予定時刻が前後することがあります。

開　会　式

主催者あいさつ

高知県国保地域医療推進協議会

会　長　　中　尾　博　憲

高知県国民健康保険団体連合会

理事長　　楠　瀬　耕　作

来　賓　祝　辞

全国国民健康保険診療施設協議会

会　長　　小　野　剛　　氏

総　合　司　会

高知県国保地域医療推進協議会

事務部会長　稲　田　　修

（四万十市国民健康保険西土佐診療所事務局長）

第３５回高知県国保地域医療学会

優　秀　研　究　表　彰　式

【優秀研究 演題】

「四万十町発!!『大規模災害時（DVI：Disaster Victim Identification 災害被害者身元確認作業）のオートプシーイメージング Ai 技術の活用』」

【発表者】

四万十町国民健康保険大正診療所　事務長補佐兼診療放射線技師

大川　剛史　氏

研　究　発　表

研　究　発　表

＜ 医師部門 ＞

○座　長　　高知県国保地域医療推進協議会 医師部会長　佐　野　　正　幸
（本山町立国民健康保険嶺北中央病院 院長）

○発　表

「間質性肺炎に原因不明の多発脳梗塞を合併した一例」
本山町立国民健康保険嶺北中央病院
医師　川　村　　祐　人

＜ 看護部門 ＞

○座　長　　高知県国保地域医療推進協議会 看護部会長　前　田　　順　子
（大月町国民健康保険大月病院 兼 大月町地域包括支援センター 総括技監）

○発　表

「療養病棟での保湿クリームを使用したスキンケアへの取り組み」
佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　和　田　　大　輝

「地域包括ケア病床における、退院困難事例へのアプローチ」
佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　森　本　　真　由

「自施設での血管病調整看護の取組評価と今後の課題」
佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　山　本　　優　子

＜ 技術者部門 ＞

○座　長　　高知県国保地域医療推進協議会 技術者副部会長　篠　田　　知　佐
（四万十市国民健康保険西土佐診療所 管理栄養士）

○発　表

「導入してよかった！！トモシンセシスの有用性」
四万十町国民健康保険大正診療所
診療放射線技師　大　川　　剛　史

「介護老人保健施設の入所者における日常生活動作能力と下肢骨格筋量および質との関係」
いの町立介護老人保健施設仁淀清流苑
理学療法士 木　下　　裕　矢

研究発表 1

「間質性肺炎に原因不明の多発脳梗塞を合併した一例」

発　表　者　　本山町立国民健康保険嶺北中央病院
医　師　　川　村　祐　人

共同研究者　医　師　　佐　野　正　幸　　医　師　　川　村　欣　之
医　師　　安　井　渉　　医　師　　佐　藤　真　紀
医　師　　池　田　達　也

発表要旨

患者は９０代女性、1 週間前からの体調不良、食事摂取量低下、37 度台の発熱あり救急要請された。CT で両側肺にすりガラス影、血液検査で炎症反応の上昇を認め細菌性肺炎疑いで入院し、抗菌薬治療開始となった。入院 2 日目に左上肢の脱力あり頭部 MRI を実施、DWI（拡散強調画像）で右中大脳動脈領域に多発する高信号を認め急性期脳梗塞と診断された。ご家族と相談し当院で保存的加療の方針となり脳保護薬、抗血小板薬を開始した。明らかな心房細動や頸動脈プラーク、心室内の疣贅、悪性腫瘍を認めず脳梗塞の発症原因は不明であった。入院時より使用していた CTRX（セフトリアキソン）は効果不十分と判断し TAZ/PIPC（タゾバクタム／ピペラシリン）に変更となった。翌日呼吸器内科コンサルトし原因不明の間質性肺炎、ARDS（急性呼吸窮迫症候群）の診断でステロイドミニパルス療法の方針となり mPSL（ソルメドロール）500 ㎎×３Days 実施した。また肺炎契機の心不全も発症しており利尿剤も併用した。その後炎症は改善傾向にあるものの酸素需要改善せず、徐々に呼吸状態悪化し HFNC（ハイフローネーザルカニューレ）での高流量酸素投与に変更した。その後状態改善することなく入院後 20 日で永眠された。原因不明の間質性肺炎、多発脳梗塞により救命し得なかった一例を経験した。

（メモ）

研究発表 ２

療養病棟での保湿クリームを使用したスキンケアへの取り組み

発　表　者　　佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　　和　田　大　輝

共同研究者　　看護師　　鴛　海　理　花
看護師　　西　田　佳　史
看護師　　中　井　直　人

発表要旨

高齢者の皮膚は、加齢により菲薄化や扁平化、弾力の低下や乾燥が生じ、脆弱化してスキントラブルの発生リスクが高まり、わずかな摩擦やずれによってスキン・テアが発生しやすくなる。病棟の入院患者の平均年齢は８８.１歳と高齢で日常生活自立度 C1-2 の患者が８０%、中心静脈栄養の患者は４０%で、栄養状態の低下や浮腫があり、スキン・テアリスクが高くスキントラブルを抱えている患者が多い。スキン・テアを予防するために、栄養管理や外力保護ケアなど様々なものがあるが、どこの施設でもすぐに取り組むことができるのは保湿である。保湿クリームには角質柔軟性の保持、角層の水分保持性の向上、皮膚のバリア機能の獲得がある。保湿クリームを塗布することで、全身を観察でき皮膚の損傷や褥瘡の早期発見や予防につながる。保湿クリームは安価で、家庭でも継続してできる予防的スキンケアとして着目し、病棟で保湿クリームを使用したスキンケアに取り組んだので報告する。

（メモ）

研究発表 3

地域包括ケア病床における、退院困難事例へのアプローチ

発　表　者　　佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　　森　本　真　由

共同研究者　　看護師　　西　田　裕　美　子
看護師　　西　森　大　貴
看護師　　坂　本　伸　也

発表要旨

日本は 2010 年に５人に１人が 65 歳以上という超高齢社会となり、その後も高齢化率は上昇の一途をたどっている。このような中、2014 年度の診療報酬改定では、「急性期治療を経過した患者及び在宅において療養を行っている患者等の受け入れ並びに患者の在宅復帰支援等を行う機能を有し、地域包括ケアシステムを支える病棟の充実」が求められていることから、地域包括ケア病棟（病床）が新設された。当院も地域包括ケア病床を設置し、多職種との連携で在宅復帰を目指した取り組みを行っているが、高齢患者の増加と高齢家族を取り巻く状況は厳しく、スムーズな在宅復帰が難しい事例が増えている。

今回、第２腰椎圧迫骨折で地域包括ケア病床に入院した退院困難事例の在宅移行支援を通して、地域包括ケア病床における看護師の関わり方について、考察し抽出した課題を今後の退院支援に活かしたいと考え取り組んだので報告する。

（メモ）

研究発表 4

自施設での血管病調整看護の取組評価と今後の課題

発　表　者　　佐川町立高北国民健康保険病院
看護師　　山　本　優　子

共同研究者　　看護師　　小　野　山　美　喜
看護師　　森　下　桐　華
看護師　　刈　谷　亜　季

発表要旨

高知県では、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとした血管病対策が課題となっている。そのため、看護師を核とした糖尿病患者への継続的かつ効果的な療養教育体制の構築を目的とした「高知県保健指導連携体制構築事業」が開始された。自施設では、2019 年よりこの事業に参画し、治療中断やコントロール不良になりやすいハイリスク者を抽出し、初年度から 2022 年度までの 4 年間で 73 名の糖尿病患者に介入を行っている。重症化予防や健康増進に向け、看護が担う役割は看護の基本で非常に重要である。コロナ禍でマンパワー不足の中、通常勤務をこなしながらの血管病調整看護活動は 5 年目に入り、実践の現状と課題整理を行ったので報告する。

（メモ）

研究発表 5

導入してよかった！！トモシンセシスの有用性

発　表　者　　四万十町国民健康保険大正診療所
事務長補佐兼診療放射線技師　　大　川　剛　史

共同研究者　　高知医療センター　入　吉　宏　紀
高知医療センター　石　井　隆　之
大正診療所所長　　宗　円　幸　子
大正診療所副所長　徳　橋　理　沙

発表要旨

【はじめに】
2020 年 3 月にトモシンセシス（断層撮影）の機能を備わった X 線透視撮影装置を導入した。
【目的】
へき地診療所において、超高齢化社会におけるトモシンセシスの多様性について症例報告する。
トモシンセシスの有用性の共通点として、
・レントゲンよりよく見える！（詳細な部位・構造や形態・位置関係）
・CT より低被爆で撮影時間が短い！
といった X 線単純画像（以下レントゲン）・CT 画像とも違う診方ができる。
また、整形外科領域や胸部領域でもその有用性は国内外からも報告されている。
【考察】
トモシンセシスはうまく使えば非常に有用で、CT のない施設でも、レントゲンよりも多くの情報を得られる。特に整形外科領域で、微小な骨折やインプラントによる金属アーチファクトも影響なく評価できるのはかなりの強みである。
胸部領域でも、CT より少ない被曝量でスクリーニングができ、不必要な CT 撮影を減らすことができそう。胸部検診にもトモシンセシスは有効である。
その他、副鼻腔炎やイレウスの際にも有用性が確認されている。幅広い分野でも活用が期待できる。

（メモ）

研究発表 6

介護老人保健施設の入所者における日常生活動作能力と下肢骨格筋量および質との関係

発　表　者　　いの町立国民健康保険介護老人保健施設仁淀清流苑
理学療法士　　木　下　裕　矢

共同研究者　　理学療法士　　池　本　祐　貴
理学療法士　　小　笠　原　圭　吾
医　　師　　志　賀　　舞

発表要旨

【目的,はじめに】

骨格筋の機能低下は、フレイルの大きな要因であると報告されている。そこで、今回は介護老人保健施設の入所者を対象に、日常生活動作能力と下肢骨格筋機能の関連について検討することを目的とした。

【方法】

対象は、本研究内容に同意を得た 31 名(年齢 85.9 歳、男性 8 名、女性 23 名)とした。日常生活動作能力は、Barthel Index(B.I)を用いて評価した。下肢骨格筋は、超音波エコーにて大腿筋厚と筋輝度を測定した。そして、各項目間の相関関係を確認した。統計学的有意水準は 5%とした。

【結果】

中央値(四分位範囲)で示す。B.I は、60(37.5-65)点、筋厚は、18.6(14.8-23.7)mm、筋輝度は、143.7(127.2-163.3)であった。B.I と筋厚(ρ=0.53,P<0.01)、B.I と筋輝度(ρ=-0.46,P<0.01)、それぞれに有意な相関関係を認めた。

【考察および結論】

骨格筋量の低下や筋輝度の上昇は、転倒・骨折、死亡リスクの増大、日常生活の活動能力の低下などに関係することが報告されている。本研究により、日常生活動作能力の維持・向上を図るためには、下肢骨格筋機能の低下を予防・改善する必要性が示唆された。

（メモ）

特　別　講　演

講師略歴

石　田　　健　司　（いしだ　けんじ）

昭和 31（1956）年　生まれ

《経　歴》

昭和 47 年　土佐清水中学校卒業
昭和 50 年　高知学芸高校卒業
昭和 55 年　関西学院大学商学部 卒業
昭和 62 年　高知医科大学卒業　・　整形外科学教室 入局
平成元年　　国立高知病院 勤務
平成 3 年　　国立療養所東高知病院 勤務
平成 15 年　高知医科大学 リハビリテーション部助教授
平成 21 年　高知大学医学部 病院教授
平成 26 年　宮城県栗原市立栗原中央病院 副院長　・　東北大臨床教授
　　高知大客員教授、　高知工科大学 客員教授
令和 2 年　　高知県本山町立嶺北中央病院 副院長

《所属学会・学会活動》

日本リハビリテーション医学会　　専門医・指導責任者
日本リウマチ学会　　専門医・評議員
日本整形外科学会　　専門医
日本臨床神経生理学会　　専門医

特 別 講 演

フレイル・ロコモ克服に向けて

―経験と想い―

本山町立国民健康保険嶺北中央病院
副院長　　石　田　　健　司　氏

日本の超高齢社会は、世界の先頭を走っている。その中にあって、いかに要介護状態にならず、健康寿命を延伸させられるかが重要なテーマであり、フレイルやロコモティブ症候群への対応が重要で、喫緊の課題である。2022 年に日本医学会連合の宣言が提示された。そこでは今後の日本の方向性が、各診療科や各専門職種ごとに、＜今後のフレイル・ロコモへの取組みビジョンあるいは目標＞と＜ビジョンあるいは目標を達成するための行動計画＞が、記載されている（一読頂きたい）。

今回フレイル・ロコモについて、改めて見直し、現在の両者の関係をお伝えし、そして小生がロコモティブ症候群に関して、介護予防事業でかかわってきたことを報告する。小生の経験が、なんらかの参考になればありがたい。また介護予防事業に少し関わってきた一医師として、行政職の方々に、お願いもある。今回、小生の想いを聞いていただき、各地区で 特色のある取組みを運用してもらいたい。そして高齢化先進地の名に恥じぬよう、高知県から全国に発信すべきことが見いだせれば幸いである。

（メモ）

パネルディスカッション

パネルディスカッション

【 テ　ー　マ 】　　これからの地域包括医療・ケア

－ フレイル予防を目指して －

【 パネリスト 】

本 山 町：健康福祉課　主　　幹　　大　利　　優　氏

仁淀川町：健康福祉課　課長補佐　　石　本　　ま　き　氏

大 月 町：長寿政策課（地域包括支援センター）
作業療法士　　市　吉　　紗　也　氏

【 助　言　者 】

本山町立国民健康保険嶺北中央病院
副院長　　石　田　　健　司　氏

全国国民健康保険診療施設協議会
会　長　　小　野　　剛　氏

【 座　　長 】

高知県国保地域医療推進協議会
医師部会長　佐　野　　正　幸
（本山町立国民健康保険嶺北中央病院 院長）

本山町のフレイル予防の取り組み

―病院と協働した高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施―

本山町　健康福祉課
主幹（保健師）　大　利　　優　氏

本山町は、高知県の中央山間部に位置し、人口 3,274 人、高齢化率 46.8%の少子高齢化の進む地域である。

本町では長年、地域医療健診、一般介護予防教室等の各種保健事業を嶺北中央病院と協働して運営してきた経過があり、また地域では、住民主体で「地域ミニデイ」が開催され、各地区に合ったやり方で健康づくりや介護予防に取り組んできた。

令和２年４月、医療保険制度の適正かつ効率的な運営を図るための健康保険法等の一部改正により、「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施」が市町村事業として位置づけられ、本町でも既存の事業をベースに「フレイル予防」の視点を取り入れ、令和３年度には後期高齢者医療広域連合の受託事業としての取り組みを開始した。

本事業における本町の特色は、病院・健康福祉課・地域包括支援センターによる定例会「御三卿の会」で情報共有を行い、病院医師・看護師と地域に出向き、健康支援活動を実践していることである。病院の外で医療専門職と直接対話できる機会は、地域の高齢者を元気づけることにつながっている。

しかし、同時期にコロナ禍に見舞われ、事業縮小や関係者の行動制限等を余儀なくされたことで、十分に事業展開できなかったことは悔やまれる。

まだまだ発展途上の取り組みとして、今後も過去の反省を踏まえながら関係者で協働し、本町の特色を活かした持続可能な取り組みを進めていきたい。

（メモ）

フレイル予防を基軸とした健康長寿のまちづくり
～地域で取り組む高齢者の健康・その環境づくり～

仁淀川町　健康福祉課
課長補佐　石　本　　ま　き　氏

仁淀川町は高知市から約５０ｋｍ、車で約１時間の距離にあり、松山市とのほぼ中間に位置する中山間地域である。

人口は昭和 22 年の 26,124 人をピークに減少し続けており、令和６年１月現在の推計人口は 4,349 人、高齢化率 57.05%、後期高齢者の人口に占める割合は 37.16%である。

高齢期への漠然とした不安を抱えながら、「加齢により心も体も弱っていくことは仕方がない。」ことだと諦めていた高齢住民が、フレイルの概念を学び、同じ志を持った仲間を得たことによって、「生」に対する肯定感が向上し、「老いの坂道を一人でしょんぼり下らず、みんなと励ましあい、笑いながら歩いていこう。」と奮起し始めた。

この原動力となった黄緑の仲間（黄緑色のユニフォームを着たフレイルサポーター）は令和元年７月、20 人からスタートした。

ボランティアをしているつもりが、自分が元気をもらっていると気づいたこの活動は、「心積もりノート」と「短期集中型フレイル予防総合プログラム」の導入によって、さらに加速し、深化している。

ひとりひとりが老いの道標となり、次代の若者が老いを怖がらずに生きていけるような未来を自分たちが創ろうと奮起し始めた住民の歩みを紹介する。

（メモ）

大月町の介護予防への取り組み

～フレイル予防への専門職の関わり～

大月町長寿政策課（地域包括支援センター）
作業療法士　市　吉　　紗　也　氏

大月町は人口 4,476 人、65 歳以上人口 2,234 人、高齢化率 49.91％の超高齢化地域となっている。本町は病院・地域包括支援センター(以下、包括)・社会福祉協議会等が隣接しており、フレイル予防のみならず住民が最後まで自分の町で暮らせるよう多職種連携に取り組んできた。

本町の現状として、新規要支援・要介護認定者の平均年齢には大きな変動はないが、要支援～要介護 1（フレイルやフレイル予備軍に当てはまる方）までの認定者が増えている。そこで、包括としても多様なアプローチができるよう、令和 3 年度以降に専門職(作業療法士・地域包括ケアナース)を配置し、フレイル予防への取り組みを強化してきた。

包括への専門職配置は本町の特徴であり、地域住民やケアマネジャー・施設職員等に向けた介入を中心に実施している。作業療法士・看護師に共通して求められる部分は、ケアマネジャー等では判断がつかない専門的な部分の判断やリハビリ・医療関係との連携等が多い。地域住民を幅広くカバーする包括の役割と「個別」に介入する事の多い専門職では、取り組むべき手法も異なってくるが、幅広く住民との関わりを持つケアマネジャーや施設職員、ヘルパーなどにも出来る限り専門職の知識を広めるよう活動していきたい。そのため、今後も継続して介護予防・フレイル予防の政策に反映させるための課題抽出を行っていくと共に、令和 6 年度は新たに通所型サービス C も展開していく予定となっている。既存の事業に加え、新たに専門職がより深く関わりながら、住民の介護予防への関心を高めフレイル予防に住民自らが取り組む地域づくりをしたいと思っている。

（メモ）

助言者

本山町立国民健康保険嶺北中央病院　副院長　石　田　　健　司　氏
（特別講演講師）

全国国民健康保険診療施設協議会　　会　長　小　野　　剛　　氏
（秋田県：市立大森病院 院長）

（メモ）

（メモ）

閉　会　式

閉会あいさつ　　高知県国保地域医療推進協議会

副会長　　佐　野　　正　幸

（本山町立国民健康保険嶺北中央病院 院長）

第６４回全国国保地域医療学会　開催予告

メインテーマ

地域包括医療・ケアで地域の「絆」をより強く
～ 地域医療学会発祥の地「イーハトーブ」から未来へ発信 ～

会　期

令和６年10月４日（金）学会・地域医療交流会　～　５日（土）学会

会　場

◇学会会場
いわて県民情報交流センター「アイーナ」
〒020-0045　岩手県盛岡市盛岡駅西通1丁目7番１号
TEL 019-606-1717

◇地域医療交流会会場
ホテルメトロポリタン盛岡「NEW　WING」
〒020-0033　岩手県盛岡市盛岡駅北通2番27号
TEL 019-625-1211

参加者負担金

◇学　　会　　1人　12,000円（昼食別途申し込み 1食1,000円）

◇地域医療交流会　　1人　10,000円